

1 おりづる

私のおじいちゃんは、私とお姉ちゃんをととてもかわいがってくれました。私たちもおじいちゃんが大好きでした。

そんなおじいちゃんの病気がとても重い病気であることが分かったのは去年の九月のことでした。それまで入院と退院をくり返していたおじいちゃんは、これからは家で病気とたたかうことに決めたのです。

「大好きなおじいちゃんのために、せいっぱいのことをしてあげよう！」

私たち家族はそう話し合いました。そして、私とお姉ちゃんが考えたのは、千羽鶴をおることでした。千羽鶴ができたらおじいちゃんはきつとよくなるのです。

「おじいちゃん、早く元気になればいいね。」

「きつと喜ぶよね。」

お姉ちゃんと私は声をかけ合いながら、毎日毎日、鶴をおり続けました。

おりづるの束は、一束一束増えていくのに、おじいちゃんの病気は、だんだん悪くなっていきました。五月になると、とうとうおじいちゃんは、食べることもできなくなり、は

げしいいたみでねむることさえできなくなってしまいました。

私は、大好きなおじいちゃんに少しでも元気でいてほしかったから、学校から帰るとまず先におじいちゃんの顔を見に行きました。顔を見ると安心しました。少しでもゆっくり休んでもらおうと、家の中では大きな音をたてないようにしました。

ある日の夕方、お母さんが私とお姉ちゃんをよぶ声がしました。そこには、いつもとちがうきびしい顔をしたお父さんとお母さんが座っていました。私とお姉ちゃんは正座をしてお父さんの話を聞きました。お父さんは苦しそうに話しました。

「おじいちゃんの命はもう長くない。もうすぐこの世を旅立つんだよ……」

次の日から、私とお姉ちゃんは、さらに気持ちを込めて鶴をおり続けました。千羽鶴ができあがるまでもう少し……もう少しです。作る手に力が入ります。

（がんばって！おじいちゃん。千羽鶴がおじいちゃんをきつと救



つてくれる。)

でも…。千羽鶴せんぼじゅるは間に合いませんでした。六月二十六日の夜、おじいちゃんの息が急に苦しそうになりました。私は心ぞうがドキドキしました。

(死なないで！おじいちゃん！)

私たち家族は、声をかけたり体や手足をさすったりしました。でも、おじいちゃんの息は、だんだん弱くなっていきます。そして、とうとう息が止まりました。

「お亡なくなりになりました。」

お医者さんの声が静かに部屋にひびきます。お母さんが泣き崩くずれました。お父さんのなみだを初めて見ました。私もお姉ちゃんも悲しくて悲しくて、おじいちゃんにすがつてなみだをボロボロ流して泣きました。こんなに悲しいなみだを流したのは生まれて初めてでした。こんなにたくさん泣いたのも生まれて初めてでした。

次の日は、お通つ夜やでした。おじいちゃんの思い出がよみがえります。私わたしとお姉ちゃんは、お通つ夜やの間中、ずっと泣きながら間に合わなかった鶴つるをおり続けました。

「もう十分よ。おじいちゃんもきつとそう思っているわよ。ありがとう。」

なみだを流しながらお母さんが言ってくれました。

そして今日はお葬式^{そうしき}。千羽には少し足りないおりづるをおじいちゃんの棺^{ひつぎ}に入れました。最後のお別れをすませてから火葬にしました。ボロボロのほねだけになってしまったおじいちゃん、なみだが止まりませんでした。もう二度とおじいちゃんの元気な姿^{すがた}を見ることはできない、おじいちゃんはもう生き返ることはないんだ、ということがはつきりと分かりました。

いつしよに入れた千羽鶴^{せんぼづる}はおじいちゃんといっしょになくなってしまいました。私^{わたし}とお姉ちゃんのかたに手をかけて、お父さんが言ってくれました。「千羽鶴^{せんぼづる}は、よう子とお姉ちゃんのやさしい気持ちといっしょに、おじいちゃんのところへ羽ばたいて行ったんだよ。ありがとう。」

私^{わたし}とお姉ちゃんは空を見上げました。おじいちゃん的笑顔が見えたようでした。



2 「いのち」の重さ

昭和二十年（一九四五年）八月九日。この日も朝から暑く、ぬけるような青空でした。戦争中で生活はきびしかったのですが、苦しいながらも、ともに助け合い、いたわり合い、今と変わらないキラキラした笑顔の家族の姿が、長崎にはありました。

午前十時三十分ごろ、空しゅう警報が鳴りました。

「お母さんたちもすぐ行くから先に防空ごうに行つとかんね。」

この母の言葉で私と妹は、母や姉よりも先に、家から少しはなれた防空ごうに向かいました。それが最後とも知らずに…。

しばらくすると「空しゅう警報、かいじよ。敵の飛行機は来ません。」という声

が聞こえました。防空ごうの中にいた大人も子どもも「よかったあ。」と笑顔で外へ出てきました。でも、私わたしと妹はそのまま防空ごうの中に残って遊んでいました。そのときです。

ピカッ！ ドーン！ バーン！

すさまじい光と音と風。私わたしも妹もそのあと気を失いました。

午前十一時二分、長崎に原子爆弾げんしばくだんが落とされたのです。この一発の原子爆弾げんしばくだんで、何のつみもない七万人をこえる人の命が一しゅんにしてうばわれたのです。

目がさめました。生きていました。妹も。だれもいなかった防空ごうの中には、体中にひどいきずを負った人がおおぜい集まっていました。

「お母ちゃん！ お姉ちゃん！」

私わたしは妹と二人で、母と姉をさがすため、防空ごうを出ました。すると辺り一面焼け野原。真っ黒で血だらけの人たち。いたるところに死体があたくさん重なって

ます。家の近くにもたくさんさんの死体。大人、子ども、そして赤ちゃんも。信じられない光景が広がっていました。私わたしと妹はこの世の地ごくを見たのです。

「お母ちゃん！ お姉ちゃん！」

私わたしは幼い妹の手を引きながら、母と姉を必死でさがしまわりました。母と姉が心配で心配で…。二人で泣きながらあちこちさがしまわりました。

「お母ちゃん！ お姉ちゃん！」

でも、私わたしたちの願いもむなしく、姉は家の近くで、そして母も近所のおばちゃんの家で死んでいました。そのときは今でもわすれられません。

いつもと変わらない朝をむかえたはずなのに、



幸せだった家族は、私と妹の二人だけになってしまいました。あの日の母と姉の最後の笑顔が今でもわすれられません。

「お母ちゃんもお姉ちゃんも死んでしもうたねえ。」

「お母ちゃんに会いたかねえ。」

「お母ちゃんやお姉ちゃんといっしょに死んでしまえばよかったねえ。」

くる日もくる日も悲しくて悲しくて、私も妹も生きる気力さえ失いかけてました。私たちのまわり、いや、長崎中に、私たちと同じように家族を亡くした人がたくさんいました。それでも、みんな歯をくいしばって一生けんめい生きたのです。

しばらくすると、焼け野原だった長崎のあちこちから小屋を建てる音がひびき出しました。その音はしだいにふえ、大きな家も建つようにもなりました。長崎は少しずつ少しずつもとの長崎のようになり、やがてさらに大きく大きく発展していきましました。

あれから六十年……。私は、母親になり、そして孫もできました。今、母や姉の知らない新しいのちに囲まれ、幸せにくらしています。母や姉がなくなった場所には大きなプールができました。八月には、私の孫もふくめて子どもたちの楽しそうな声がプール中にひびき、キラキラがやいた親と子の笑顔があります。

プールで元気に遊ぶ孫や子どもたち、笑顔いっぱい家族の姿を見つめながら、私はいのちの重さ、いのちのとうとさ、いのちのありがたさをかみしめて、こう思います。

「お母ちゃんもお姉ちゃんももともつと私たちと生きたかっただはすよねえ。お母ちゃん、お姉ちゃんだけでなく、おとなも子どもも赤ちゃんもみんなそうだったはずよねえ。みんなの分もが



んばって生きんばねえ。」

3 学校大好き！

私は、学校が大好きです。勉強するのは、イヤだけど、大好きな先生や、大好きな友達に毎日会える、この学校という場所が大好きです。

今どき、イジメ問題や、進路の問題をかかえている学校を好きという人は、あまりいないと思いますが、私のまわりの友達も、学校が大好きだと思います。

学校には、大きなパワーがあるのです。目には、見えないけれど、大きな力があると思います。

だって、なんとなく言えないことも、学校でだと友達にポロツと言えたりするじゃないですか。なんとなく言えないことというのは、「私、君のことが好きなの。」とか、家で親に話をするのには、ちょっと恥ずかしいこととか……。

ほかにもあります。すごく落ち込んでいるときでも、学校へ行き、みんなとワイワイ話をしてしていると、自然に笑顔になって、落ち込んでることさえ、フツと忘れて元気になれ

るんです。

学校にいるときは、本当に楽しいです。心の中がピンクの色に染ま^そっていくような、幸せな気持ちになれるのです。

休み時間、昼休みは、とくに心の中がピンク色です。私の学校の昼休みの職員室^{しよくいん}は、生徒でごつたがえています。何をしているのかといえは、ただ話をしていただけなんです。くだらない話。“あの先生とあの先生、仲いいよねえ”とか、“先生とAちゃん、どっちがふとつてる”とか。本当にどうでもいい話。だけど、私は、そんな時間に、「ああ、楽しい。」「幸せだなあ。」と心から思うのです。

ほら、よく“何でもなしのようなことが、一番幸せ”というセリフを聞きますが、その通りです。毎日幸せです。笑いが絶^たえません。

私は、人生においても、学校生活でも、いい方にいい方に考えるのがいいと思います。

ある転校生が、来たときのことです。私は、なぜか、その人と仲よくなれなかったのです。

けれど、たまたま、その人の所属^{しよぞく}する部活をのぞいたときに、その人の一生懸命練習^{いっしょうけんめいれんしゅう}する姿^{すがた}がありました。

「この人ががんばるなあ。今度話しかけてみようかな。」と思ったのです。そして、少しずつ話をするうちに、仲よくなれたのです。

この時、決して「あんなにがんばってバカみたい。」とか、思ってはいけません。物事は、素直すなおに受けとめ、いい方にもつていくのがいいのです。

楽しい……？そう、学校は楽しいのです。けれど、悲しいこともあります。

それは、私の学校になかなか登校できない人がいる、ということです。 たぶん、私の学校だけでなく、ほかにもそういう人は、多くいると思います。

「学校へ来てください！」

そんなに、簡単かんたんに言うな、と思うかも知れませんが、私の考えを聞いてください。あなたにとって、学校に来ることは、ひとつの戦いだと思うのです。あなたの“学校キライ”という心との戦いだと思うのです。まず“スキ”をたくさん集めてください。そして、“学校キライ”という心をぶちこわしてください。“スキ”をたくさん集める！小さな“スキ”でいいのです。学校で見つける小さな“スキ”。

例えば、お昼の放送に曲をリクエストすることがスキとか、学校帰りの夕焼け空のグラ

デーションがスキとか、たくさん、たくさん、“スキ”を見つけて、いつか学校大好きという大きなスキにかえてください。

戦うのは、あなただけではありません。あなたのお父さん、お母さん、先生、クラスメイト、ひとりじゃありません。みんなで戦っていくのです。

人間は、ひとりでは生きていけないのです。人という漢字のように、支えあって生きていくのです。

一日でも早く学校へ来てください。

みんなで、学校という場所で、支えあいながら生きる素晴らしさ、協力してひとつのことに取り組む感動を、一緒に味わいましょう！

私は、いつか、だれもが、学校大好きと言える日が来ることを、心から望んでいます。

4 私も誰かの力になれる

「たくさん感動と勇気をありがとう。これからも応援おうえんしています。がんばってね。」

マジックで太く大きく書かれた文字。その手紙を書いてくれたのは、私わたしと同じように目が不自由なおじいさん。去年の秋、私が全国障害者スポーツ大会に出場した話を聞き、残りわずかな視力を使つかって一生涯懸命書いてくれたのでした。「こんな私でも誰だれかの力になれるんだなあ」その時私わたしは、嬉うれしさと誇ほこらしさで胸むねがいっぱいになりました。

私わたしは、いろんな場面で様々な人たちから勇気や感動をたくさんもらっています。

例えば、家族。私の家族は、全員が視覚障害者しかくしょうがいしゃです。「家族みんなが障害者しょうがいしゃなんて、さぞかし大変だろう」と思われるかもしれませんが、決してそんなことはありません。なぜなら、目のことで辛いつら思いをした時、一番私わたしの気持ちを汲くみ取って勇気づけてくれるのは家族だからです。

私が目のことでいじめられた時、

「見えんとは生まれつきやけん、しかたないたい。堂々と生きとれば、何も辛かことはなかと。」

「そうねえ。辛かねえ。頑張らんばねえ。」とにかく私の見方になって支えてくれました。

また母は、いつも私に家の仕事を手伝わせます。「イヤだなあ」と思うこともありますが、大人になってちゃんと自立できるよという障害のある母だからこそその愛情だと、今なら分かります。私にとって家族は、存在自体が生きる力なのです。

次に、友達。私には同じ歳のとても仲がいい健全者の友達がいます。隣で白杖をついて歩いていても、ループを使って携帯電話を見ている、不思議な顔一つせず、自然に接してくれます。「こい何て書いてあつと?」「こい読んで」自分の目が悪いことなど全く気にせず、遠慮なく話せます。友達は私のことを「障害者」としてではなく、「一人の友達」として接してくれます。そんな友達の態度が、私にどんなことにも立ち向かう勇気を与え

てくれるのです。

私の通う盲学校には、視覚に障害のある先生方もたくさんいます。とても前向きで、元気で明るくて、「ほんとうに障害者？」と思ってしまう私。私が今のように音楽やスポーツ、弁論大会に積極的に出場するようになったのも、何にでも挑戦させてくれる先生方のおかげです。「視覚に障害があっても生徒に自信や勇気を与えてくれるこんな素敵な先生になれるんだ。」先生方の姿は、私の未来への希望です。

そして、全国障害者スポーツ大会。私は陸上競技に出場。大会では、様々な障害者が自分の持てる力をフルに発揮して競技を楽しむ姿を目にしました。たとえ手足がなくても、目が見えなくても、自分の夢や目標に向かって精一杯努力する姿はとても感動的です。スポーツができることへの純粋な喜び、最後まであきらめない強さ。そのひたむきさは、私の胸を熱くし、「障害なんかには負けれない」という前向きな心を与えてくれました。手にした金メダルの重さは、私の努力の結果、そして明日への勇気そのものです。

たくさんの人たちからももらった勇氣や感動。今度は私が一人でも多くの人に勇氣や感動を与えたい。そして、私の夢である「盲学校の先生」になって、障害で悩む子供たちの力になりたい。

おじいさんからのあの言葉は、今も私の胸に強く響いています。私が、自分の夢に向かっていちずに頑張ることが、知らない間に誰かの力になっていることを、おじいさんは気づかせてくれました。私も誰かの力になれる。そのことが私の自信になります。そして夢に向かって大きな一歩を踏み出させてくれるのです。

たくさんさんの感動と勇氣をありがとう。

皆さんも、誰かに勇氣や感動をもらったことはありませんか。

そして、忘れないでください。あなた自身が誰かの力になっているということ。

5 つい好奇心から

インターネットを使っていたある日、私はプロフィールサイト（プロフ）というページを開きました。たくさんの方の自己紹介や、「友だちになりませんか。」という書きこみがありました。

つい好奇心から私も、自分のプロフィールサイト（プロフ）を作ってみたくなり、名前やメールアドレス、住所、電話番号などを次々に書いて「連らくしてください。」と書きこんでみました。

よく日から、さつそく、「友だちになろう。」とたくさんの方のメールがとどきました。うれしくて、家で、メールを開けるのが楽しみだったのですが、だんだんと、おかしな内よりのメールや手紙が送られてくるようになります。いたずら電話もかかってくるようになります。その数は、日に日に、どんどんふえていきます。

「どうしてこんなことに……。」
「何が、原因なんだろう。」
しかし、もう、どうすることもできません。



次のことについて 話し合ってみましょう

1 こんなことになった原因げんいんは何でしょうか。

2 ほかの人の住所や名前などをプロフィールサイト（プロフ）に書きこむとどうなるでしょうか。

3 書きこむときにどんな注意が必要なのでしょうか。